

第1回 蕎麦蘊蓄の旅

～ 信州・伊那谷行雑記～

分桜流・彩国蕎麦蘊蓄の会は、平成8年6月15・16日の両日、信州そば発祥の地を伊那谷に訪れる旅をメインに、初の「蕎麦蘊蓄の旅」を行いました。その模様を旅日記風にまとめて報告いたします。

談合坂に集う(6月15日午前10時)総勢14名の面々は、朝露を蹴り、4台の車に分乗し、中央高速道の談合坂サービスエリアに集合。伊那谷に旅立った。梅雨空はここから晴れ間をみせてくれた。

幹事世話役代表の加藤さん曰く。「参加者全員の心掛けが良いので梅雨時には珍しい好天に恵まれました。」

4台の車に分乗した面々は、梅雨の晴れ間を心地よいドライブを楽しみながら、途中の諏訪湖を望むサービスエリアでの休憩ももどかしく一路、伊那谷へ。

伊那インターを降り、車は道を思わせる山道を15分ほど走り、中央アルプス駒ヶ岳山麓(伊那市内の萱)に建つ「梅庵」に到着した。

梅庵では、地元の手打ちそば名人会、地区役員ら6人が迎えてくれる。

真打の「行者そば」は、今から1300年昔、駒ヶ岳の修行に向かう行者、役小角(えんのおづぬ)が、内の萱の里人から手厚いもてなしを受けたお礼に「一握りのそばの種」を贈る。里人は「行者そば」と名付けて伝統の味を守り続けた。

この「そばの種」は、信州全域にも広まっていったといわれる。

彩国の面々は、遅い昼食とあって、それぞれ2人分をペロリ。空腹だったのを除いても「美味だった。」と申し上げたい。

ただ、辛味大根(高遠大根)に焼き味噌で食す昔ながらの食べ方が、大根収穫のシーズン・オフとあって、少しアレンジされた「行者そば」だったのが残念でした。

「江戸・天保年間、高遠城の殿様(保科正之)は、辛くて、甘いまる味がある大根と焼味噌で作る"からつゆ"で食す「行者そば」が好物だった。

殿様の地元との契約栽培で生まれたのが"高遠大根"のいわれとか。

その後、国替えになった殿様が「行者そば」を会津若松藩に伝え、今で

も市内のそば屋には"高遠そば"(行者そば)がメニューにあるという。

さらに、福井県にも伝わり、"高遠そば"は福井名物の一つになったという。」小林史磨さん(伊那市そば打ち名人会長)が話す蘊蓄である。

梅庵前の山道(駒ヶ岳への旧登山道)を歩いて5分。

地元で里宮と呼ぶ山懐の境内の一隅に「行者そば発祥の地」と誌す碑がある。彩国の面々と地元との交流「蘊蓄の会」はこの訪問で幕となった。

伊那市・内の萱がある荒井区は、10年前から毎年(10月半ば)内の萱スポーツ公園で「行者そば祭り」を開いている。

今年は10月20日(日)「行者そば音頭」が流れる中で開かれる。梅庵は、「行者そば」を守る地元の肝いりで、脱サラの店主が開いた店である。

交流会の後、一組は「行者そば」ゆかりの高遠町の城址公園へ。一組は残雪に覆われた中央アルプス千畳敷カール(約2600メートル・駒ヶ根市)へロープウェイを乗り継いで出かけた。

夕方6時。南アルプスの山々、伊那谷を一望する「はびろ温泉」でゆったり汗を流し、夜の宴に望んだ。

名物の馬肉、山菜料理に地元般若湯、カラオケ少々(?)。この日、早立ちだったためか、夜10時過ぎには一同が眠りにつき、それぞれが清遊の一夜だった。

翌16日朝。宿の裏山にある「馬の観音様」とも呼ばれる古刹「羽広山仲仙寺」を詣でる。

はびろ温泉は「リーズナブルで人にやさしい宿」が皆の印象だったようだ。

総勢14人のうち11人は、隣接の駒ヶ根高原に向かう。前日の駒ヶ根組みは高遠町へ。

中央アルプス山麓に広がる駒ヶ根高原は、この時期、樹齢数百年の杉の巨木に囲まれた「光前寺」、新緑の映える大沼湖周辺などが緑の美しさを増していた。

名刹「光前寺」では、名庭園で心洗われる一休み。拝観料200円のうちにお茶受け(菓子)付きで、お茶が飲み放題には、一同大満足。珍しい「はすの実甘納豆」など、寺の土産物を皆買い込んでしまったようだ。

中央高速道の小淵沢インター出口先で一同は勢揃いし、昼食処と決めて

いた山梨・長坂町の「翁」へ向かう。

八ヶ岳山麓の雑木林に囲まれた「そば処翁」には、先客が20名ほど林の中の待ち合いベンチで順番待ちしていた。

ようやく席に着いた彩国の面々は、「もりそば(ざる・田舎)」だけの品書きに従い、名物そばに有り付けた。

「ここのは二八でなく三七そばではないのか」「そばつゆに少し酸味があるね」「本返しにワインビネガーが入っているとされる」などなど、蘊蓄も交わされた。

ただ、「翁」は、店内の若い女性客たちの香料の強い臭い、おさな児連れ客の群れに、味自慢の名店というより、観光地のファミリーレストラン風の名物そば処といった趣が感じられた。

「翁」に隣り合う清春芸術村(小学校跡地に民間企業が造り、白樺美術館等も併設)の駐車場で一同解散。熊谷方面組は、信州・佐久経由で信越から関越自動車道へ向かう。大宮・浦和組は、中央自動車道へ。それぞれ夕餉前に帰宅した。ともあれ、梅雨時の好天が何よりの幸運だった「蕎麦蘊蓄の旅」でした。